明治・大正期における上田の金融の歴史 -最終報告-

J20052 竹中丈二

1. テーマのねらい

明治・大正期の金融に関する資料、年表を当たり、それによって当時の上田が全国的にどれぐらいの規模で経済的に栄えていたのかを調べる。

写真：八十二銀行上田支店（旧第十九国立銀行）

2. 上田の金融業の端緒

- 上田では江戸時代より※蚕糸業が盛んで、1859(安政6)年に原町商人伊藤林之助が上田藩命のもと日本初の生糸輸出を達成している。
- 上田では特に蚕種製造に力をいれており、1860年代のヨーロッパ諸国で発生した蚕の微粒子病蔓延による蚕種需要に対しては、日本の3分の1を占める割合で生産を続け、繁栄を極めた。

↓

蚕糸業の発展を維持するために、金融が必要だった！

※蚕糸業=製糸業(糸)+養蚕業(蚕)+蚕種製造業(蚕の卵)

3. 明治前期の上田における金融

- 明治初期の信州では、蚕糸貿易や全国各地に製糸場の経営を積極的に行っていた日本有数の豪商である小野組が金融を支えていたが、1874(明治7）年に破綻し、県内経済に大きな混乱が生じた。
- 経済を安定化し蚕糸業の発展を下支えすることを目的とした銀行設立が望まれる中、1877(明治10)年に佐久地方の豪商・黒沢鷹次郎らを中心に第十九国立銀行が設立され、蚕糸事業の拡大に努めた。

↓

日本の輸出産業を担う銀行が上田に設立された！

4. 明治中期における上田の金融

- 1880年代に入り長野県では私立銀行など金融機関の設立が急速に進んでいたが、その中心となったのは上田であった。
- 1883(明治15)年時点で長野県における国立、私立銀行数合計35行のうち19行が東信地域に存在し、1885(明治17) 年における銀行類似会社数合計110行のうち83行が小県郡におかれていた。

↓

上田は信州金融の中心！

5. 明治後期における上田の金融

- 1897(明治30) 年に第十九国立銀行が私立銀行第十九銀行に転換。
- 1901年 (明治34)に長野県内の銀行数が134行と最大となり、中期では上田を含む東信地域に銀行の一極集中が起こっていたが、北信、中信地域の銀行設立がすすみ、上記3地域が金融の中心地となった。

↓

分散はしたものの、上田が金融の中心であることに変化なし！

6. 大正期における上田の金融

- 銀行設立の条件が厳しくなり、長野県内の銀行は統廃合が進んだ。その中で、上田の第十九銀行、稲荷山（千曲）の六十三銀行、長野の信濃銀行が抜きんでて台頭した。

↓

信州のメガバンクが上田に誕生！

7. ここまでのまとめ

- 上田の金融業は、明治中期頃より信州で最大の地位を確立し、大正期に至るまで一貫して中心地であり続けた。
- 最大地位確立後の上田における金融の様相は

「一極集中」→「鼎立(3地域に分散)」→「メガバンク化」

8. 上田の繁栄について

- 全国と比較した上田の経済規模を表す資料が見つからず、経済から見た上田の繁栄は確認することが出来なかった。
- しかし、「幕末から明治20年ごろまで、上田は信州の横浜であった」ことや、鹿児島の人が「祖父が明治の終わり頃に小県蚕業学校を卒業し、上田は蚕都であると言っていた」という話が存在することから、上田は幕末から明治・大正期に至るまで、蚕都として経済的に繁栄した都市であると全国的に認識されていたことが分かった。

9. 参考文献

- 「明治・大正期における銀行立地と地域特性　-長野県東信地域を対象　に-」川崎俊郎　http://hist-geo.jp/img/archive/159_021.pdf
- 日本財政経済史料
- 「八十二銀行の歴史」

  長野県の芸術・文化情報センター　公益財団法人八十二文化財団

  https://www.82bunka.or.jp/money/money.php
- 「『蚕都上田』の輝きと未来」週刊うえだ　http://www.weekly-ueda.co.jp/santo/index.html

ご清聴ありがとうございました。